

慢性疾患を抱える子どもの学習支援

－院内学級の講演前後の学生の記述内容の比較－

山本 裕子¹⁾*・上山 和子¹⁾・小田 慈²⁾

1) 新見公立大学看護学部 2) 新見公立大学・短期大学保健管理センター

(2015年11月18日受理)

子どもの育成に関する社会資源の一つである「院内学級」の実際についての講演を看護学生を対象に小児看護学概論の授業を利用し実施した。学生の内容理解を深める機会とするとともに学び得た内容を明らかにすることを目的に講演前後でアンケート調査を実施した。質的帰納的に分析した結果、学生は講演前では【学習支援の場】【入院している子どもに合わせた学習環境】【子どもの活力の場】【入院前の日常生活への寄り添い】、講演後ではこれらに加え【将来へつなぐ場】【心の支えとしての場】としての役割を理解することができていた。講演により、院内学級が具体的にイメージできたことが院内学級の理解を深め、その役割についてもより多く学ぶことができたと考えられた。

(キーワード) 院内学級, 慢性疾患を抱える子ども, 学生の学び

1. はじめに

近年、小児医療においては医療の進歩により難治性小児疾患の治癒率が向上し、慢性疾患を抱えながらも学校への復学、社会への復帰が可能となってきた。復学や社会復帰を念頭に、入院加療を行っている子どもに対する教育支援の必要性が重要視されている。1989年に採択された「児童の権利条約」ではすべての子どもに教育を受ける権利があるとされており、入院加療中である子どもたちに対しても保証されるべき権利である。現在、我が国においては入院中の子どもたちを対象とする教育は、特別な教育的ニーズを有する子どもたちを対象とする特別支援教育の一環として位置づけられ、「病弱教育」に含まれている¹⁾。学校教育法令22条で、病弱児とは「慢性の呼吸器疾患、腎臓疾患および神経疾患、悪性新生物その他の疾患の状態が継続して医療または生活規制を必要とする程度のもの」と、「身体虚弱の状態が継続して生活規制を必要とする程度のもの」とされ、入院している子どものみを対象としているわけではなく、移行期における子どもへの教育的支援も強調されている。このように法令的には入院加療を必要とする子どもに対し教育を受ける機会を設けるとされているが現状ではなかなか実施されていない。その理由として厚生労働省の進める医療改革による平均在院日数の短縮化、在宅療養重視の傾向、また、病弱教育を受けるにあたっては転校手続きが必要であることが指摘されている。また、2007年の学校教育法改正に伴う特別支援学校再編に伴い、病弱・身体虚弱

教育に特化した特別支援学校が減少していることが明らかにされている²⁾。

子どもにとって、学校とは勉強を教わる場である以上に、子どもが一人の人間として成長・発達するために必要なものを学んでいくところである³⁾。入院している子どもたちが病院内で学習を受けることのできる教育機関のことを「院内学級」と言っているが（以下、病院内で学習を受けることのできる教育機関を院内学級とする）、院内学級に在籍した中学生を対象とした研究では、学習への自信獲得や教育活動そのものが「病気や治療に向き合う気持ち」や「治療意欲向上」を促していたと言われており、院内学級の支援の充実の重要性を指摘している⁴⁾。以上のように入院生活を送る子どもたちを身近で支える看護師として、子どもたちの全身状態を把握し看護に当たるのはもちろんのことながら、学校で学ぶ機会が減るということが子どもたちの成長・発達にどのような影響があるのか考えていくことも重要な視点であると考えられる。

本研究では、小児看護学で特別支援学級である「院内学級」の活動の実際についての講演前後でアンケートを実施し、「院内学級」の学びを深めるとともに、看護学生の講演前後での記述内容を比較検討し、学びの内容を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

1) 調査対象

A 大学看護学部看護学科2年生を対象とし、自由意思

*連絡先：山本裕子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

で協力の得られた18名を調査対象とした。

2) 調査期間

平成27年 7月

3) 調査方法

小児看護学概論の授業一コマを利用し、子どもの育成に関する社会資源の一つである特別支援学級、「院内学級」の概要および活動の実際についての講演を実施。講師は自身が幼少期に入院加療中に院内学級を活用した経験者へ依頼。講演時間は1時間程度とし、講演後に質疑応答の時間を設けた。

講演前に研究についての説明を行い、無記名自記式アンケート用紙を配布。質問紙の回収は書留め法とした。

4) 研究内容

「院内学級」のイメージ化の程度、「院内学級」の必要性の有無、「院内学級」への理解度を4件法で回答を求め、「院内学級」における学習面と生活面での役割をそれぞれ自由記述で回答を求めた。

5) 分析方法

データ分析は量的データについては単純集計を行い、記述回答についてはコード化し、意味内容の類似性のあるものを分類し、質的帰納的に分析を行った。分析過程においては、3名の研究者で繰り返し検討を行った。

6) 倫理的配慮

アンケートへの回答は学生の自由意思であり、無記名であること、成績には関係しないことを記載した研究説明書を配布。アンケートの返信をもって同意が得られたものとした。本研究はA大学倫理委員会の承認を得て実施した。

3. 結果

講演会への出席者56名へ調査用紙を配布し、18名から回答が得られた(回収率32.1%)。

1) 院内学級への理解度

「院内学級」を具体的にイメージできるかという問いに対し、講演前は「あまりできない」と答えたものが83%(15人)と最も多く、次いで「まあできる」と回答したものが11%(2人)であった。講演後は「まあできる」と回答したものが56%(10人)と最も多く、次いで「とてもできる」が44%(8人)であった。

次に、「院内学級」は必要だと思うかという問いに対し、講演前は「とても思う」「まあ思う」と回答したものがそ

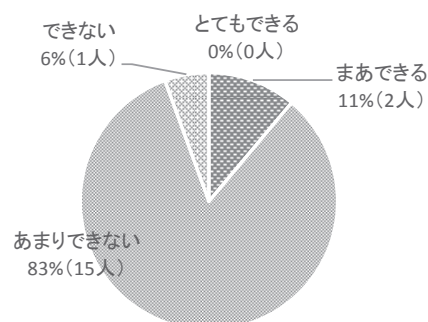


図1 院内学級を具体的にイメージできる (前)

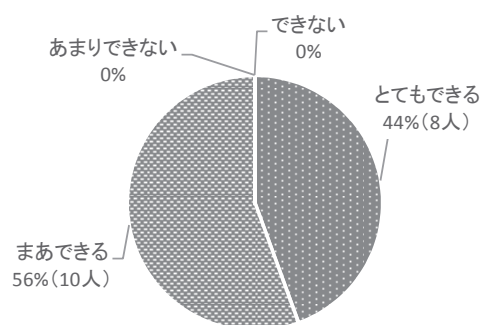


図2 院内学級を具体的にイメージできる (後)

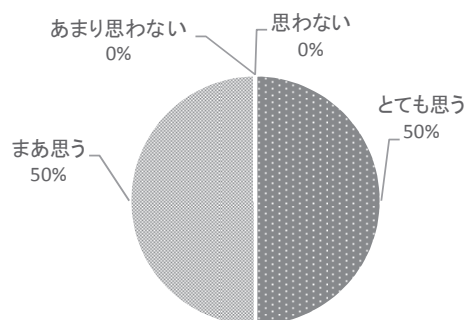


図3 院内学級は必要だと思う (前)

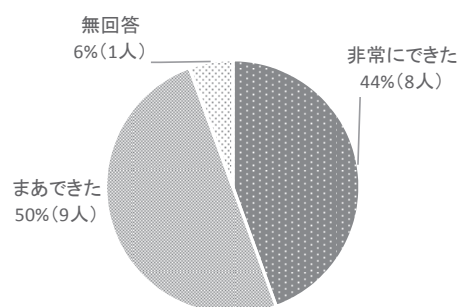


図4 院内学級について理解できた

れぞれ50%(9人)であったが、講演後では全員が「とても思う」と回答していた。講演後に「院内学級」について理解できたかという問いに対しては、「まあできた」

慢性疾患を抱える子どもの学習支援

と回答したものが50%（9人）と最も多く、次いで「非常にできた」が44%（8人）と多かった。

2) 「院内学級」の役割の記述内容の構成

学生より得られた記述内容を分析した結果を示す。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを『 』, コードを< >で示す。

講演前の学生が考える「院内学級」の役割についての分析結果を示す（表1）。コード数は69で、10のサブカテ

ゴリー、4のカテゴリーが抽出された。講演前の学生は【学習支援の場】【入院している子どもに合わせた学習環境】【子どもの活力の場】【入院前の日常生活への寄り添い】として「院内学級」には役割があると考えていた。

講演後の学生が考える「院内学級」の役割についての分析結果を示す（表2）。コード数は82で、14のサブカテゴリー、6のカテゴリーが抽出された。講演後の学生は【学習支援の場】【入院している子どもに合わせた学習環境】【子どもの活力の場】【将来へつなぐ場】【入院前の

表1 院内学級の役割（講演前）

カテゴリー	サブカテゴリー	内容
学習支援の場	学習過程の獲得	学習するという習慣を身につける (3) 学力を身につける (2) 学習能力を身につける (2) 考える思考力をつける
	復学に向けた学習支援	退院後に学校へ行きやすくする (3) 学習の遅れの回避
入院している子どもに合わせた学習環境	学童期に必要な知識の習得	基礎知識を身につける(5) 教養が深まる 初歩の計算 文字の書き方を学ぶ
	通学できない子どもの学習の場	通学できない子どもたちに学校と同じような教育をしている (3) 入院中の子どもも勉強できる (2) 病院にずっといるだけではわからない知識を得る 学校のように友達と一緒に勉強できる
	個性のある教育の場	一人ひとりに対して、きちんと教育がおこなわれている (3) 先生と距離が近い (2) 体罰に合わせる
子どもの活力の場	子どもの成長・発達への支援	子どもの成長を妨げない (2) 楽しむ (2) 生きていく上で大切なことを学ぶ 視野が広がる 興味が広がる
	子どもたちの学習意欲の支え	学ぶことの楽しさを教える (2) やる気をつくる
	他者との交流の場	他者との交流(先生、他の病気の子どもたち) (5) 友達ができる (3) 先生、友達とコミュニケーションをとること
入院前の日常生活への寄り添い	生活リズムの維持	生活リズムをつくる (6) 規則や時間を守ることの大切さを学べる (4) 学校に通える 日常生活動作を身につける
	集団生活から学ぶ対人関係	集団生活を学べる (3) 社会性を身につける コミュニケーションをつける

表2 院内学級の役割（講演後）

カテゴリー	サブカテゴリー	内容
学習支援の場	復学に向けた学習支援	復学した際困らない (4) 学習の遅れなくす (1) 学習が遅れているという不安を取り除く
	学童期に必要な知識の習得	基礎知識を身につける (4) 教養を深めることができる 勉強を教える
入院している子どもに合わせた学習環境	通学できない子どもの学習の場	通学できない子どもたちでできるだけ学校と同じような教育をしている 病気の治療しながら勉強できる テストもあり、積極的に学ぶ姿勢を身につけられる 一人ひとりに合った学習内容 (3)
	個性のある教育の場	子どもたちに合った学習ができる 病気のことを忘れて学習できる (3)
	子どもたちの学習意欲の支え	意欲が高まる 視野が広がる 学ぶ楽しさを教える 学びたいという気持ちにこたえる
子どもの活力の場	他者との交流の場	友達づくり (6) 人との関わり (3) 友達と楽しく過ごせる場 (2) 先生、友人を通して、人間関係を築く 先生、友達と過ごすことで自分らしく過ごせる
	自己表現の場	個人としてみられる
	将来への希望の場	病気の治療目的ではなく、人と触れ合え、本来の自分が出せる 未来のことを考えてするため回復に向かうことができる 将来があるという活力 自己や他者の病気の理解 将来への希望を持つ 将来のため (4)
入院前の日常生活への寄り添い	子どもたちの将来を見据えた支援	退院した時、社会に出るため 大人になるため その子の将来や夢の実現を支援する
	生活リズムの維持	入院生活のメリハリ 学校に行かない習慣ができる 充実した1日サイクルになる
	学習以外の学びの場	楽しいことをいっぱいする (2) 様々な経験ができる 「遊ぶ」ことを楽しむ
	集団生活から学ぶ対人関係	チームワークや社会性を学ぶ (6) 社会生活を身につける 対人関係を学べる コミュニケーション力を身につける 社会に出るための準備 季節の行事を楽しむ (5)
心の支えとしての場	季節を感じる場	季節を感じる (5) 生活を楽しむ
	心の支えとしての場	心理的な安定 (3) 同じつらさや苦しみを抱えている子どもとふれあい、共感ができる 心の成長につながる 心を豊かにできる 同じ境遇である子ども同士、支えあう

日常生活への寄り添い】【心の支えとしての場】として「院内学級」には役割があると考えていた。

(1) 学生が考える講演前の「院内学級」の役割で抽出されたカテゴリーの内容

【学習支援の場】では、『学習過程の獲得』『復学に向けた学習支援』の2つのサブカテゴリーで構成されていた。特徴的なコードとして、『学習過程の獲得』では、<学習するという習慣を身につける><学力を身につける>、『復学に向けた学習支援』では、<学習の遅れの回避><退院後へ学校に行きやすくする>など学習の支援内容を挙げていた。

【入院している子どもに合わせた学習環境】では、『学童期に必要な知識の習得』『通学できない子どもの学習の場』『個別性のある教育の場』の3つのサブカテゴリーで構成されていた。特徴的なコードとして、『学童期に必要な知識の習得』では、<基礎知識を身につける>、『通学できない子どもの学習の場』では、<通学できない子どもたちに学校と同じような教育をしている>、『個別性のある教育の場』では、<一人ひとりに対して、きちんと教育がおこなわれている>など入院する前に進んでいた学習を継続できる学習環境を挙げていた。

【子どもの活力の場】では、『子どもの成長・発達の支援』『子どもたちの学習意欲の支え』『他者との交流の場』の3つのサブカテゴリーで構成されていた。特徴的なコードとして、『子どもの成長・発達の支援』では、<子どもの成長を妨げない>、『子どもたちの学習意欲の支え』では、<学ぶことの楽しさを教える>、『他者との交流の場』では、<他者との交流（先生、他の病気の子どもたち）>などがあり、入院生活を送るなかで子ども本来の姿が失われないような役割が挙げられていた。

【入院前の日常生活への寄り添い】では、『生活リズムの維持』『集団生活から学ぶ対人関係』の2つのサブカテゴリーで構成されていた。特徴的なコードとして、『生活リズムの維持』では、<規則や時間を守ることの大切さを学べる>、『集団生活から学ぶ対人関係』では、<集団生活を学べる><社会性を身につける>などがあり、入院という限られた環境の中で、本来子どもが日常生活を送る中で得られる学びを院内でも送ることができるという役割を挙げていた。

(2) 学生が考える講演後の「院内学級」の役割で抽出されたカテゴリーの内容

【学習支援の場】では、『復学に向けた学習支援』の1つのサブカテゴリーで構成されていた。特徴的なコードとして<学習の遅れをなくす><復学した際困らない>などが挙げられていた。

【入院している子どもに合わせた学習環境】では、『学童期に必要な知識の習得』『通学できない子どもの学習

の場』『個別性のある教育の場』の3つのカテゴリーで構成されていた。特徴的なコードとして、『学童期に必要な知識の習得』では、<基礎知識を身につける>、『通学できない子どもの学習の場』では、<通学できない子どもたちにできるだけ学校と同じような教育をしている>、『個別性のある教育の場』では、<一人ひとりに応じた学習内容>など入院している子どもたちへの学習支援としての特徴的なものを挙げていた。

【子どもの活力の場】では、『子どもたちの学習意欲の支え』『他者との交流の場』『自己表現の場』の3つのサブカテゴリーで構成されていた。特徴的なコードとして、『子どもたちの学習意欲の支え』では、<病気を忘れて学習できる>、『他者との交流の場』では、<友達づくり><人との関わり>、『自己表現の場』では、<先生、友達と過ごすことで自分らしく過ごせる>など子どもの意欲を支え、子ども本来の姿でいられる場を提供する役割が挙げられていた。

【将来へつなぐ場】では、『闘病意欲の向上』『子どもたちの将来を見据えた支援』の2つのサブカテゴリーで構成されていた。特徴的なコードとして、『闘病意欲の向上』では、<未来のことを考えてするため回復に向かうことができる><将来があるという活力>、『子どもたちの将来を見据えた支援』では、<将来のため><退院した時、社会に出るため>など、子どもたちが退院した時のことを考えた支援を行っていく役割を挙げていた。

【入院前の日常生活への寄り添い】では、『生活リズムの維持』『学習以外の学びの場』『集団生活から学ぶ対人関係』『季節を感じるができる場』の4つのサブカテゴリーで構成されていた。特徴的なコードとして、『生活リズムの維持』では、<入院生活のメリハリ><学校に行くという習慣ができる>、『学習以外の学びの場』では、<様々な経験ができる><「遊ぶ」ことを楽しむ>、『集団生活から学ぶ対人関係』では、<チームワークや社会性を学ぶ>、『季節を感じるができる場』では、<季節の行事を楽しむ>など、入院しても入院前に送っていた日常生活に近い時間を子どもに提供する役割を挙げていた。

【心の支えとしての場】では、1つのサブカテゴリーであった。特徴的なコードとして、<心理的な安定><同じつらさや苦しみを持っている子どもとふれあい、共感ができる>など、院内学級での他者との交流を通して入院生活や体調における不安を取り除くという役割を挙げていた。

4. 考察

1) 「院内学級」への理解度

対象学生である看護学科2年生は、講演前に事前学習として子どもの育成に関する社会資源のうち院内学級について少なからず知識を持っていたと思われるが、講演前のアンケートでは「院内学級」を具体的にイメージすることが困難であり、「院内学級」の必要性を強く感じることができない学生が多かった。しかし、講演を聞くことで「院内学級」を具体的にイメージすることができ、その必要性を感じることができていたと考える。講演により、自己学習では学ぶことのできない経験者の思いを学ぶことができ、院内学級をより詳細にイメージすることができ、理解につながったと考える。小児看護学実習ではこれらの視点を含め看護過程を展開していくが、院内学級を持つ病院での実習や長期入院を必要とする子どもを対象とすることは少なく、身近な問題として捉えることは難しい。実際、問題に直面する前に潜在している問題を知ること、イメージすることは今後の看護援助を展開していく上で重要なことであると考える。

2) 「院内学級」の役割についての記述内容の分析

院内学級の実際についての講演を実施し、その前後の学生の学びの内容を分析した。講演前の記述内容からは、院内学級としての役割は情緒、社会性、知的機能、コミュニケーションの4つのことが挙がっていた。これらは、子どもが遊びや学びを通して学ぶ能力であり、講演前に学生は院内学級の役割を認識することができていたと言える。しかし、院内学級の役割は情緒や社会性、知的機能、コミュニケーションの4つの側面だけではなく、先行研究からも明らかにされているように精神的支え、治療意欲の向上、自己成長や退院後の意欲向上が挙げられる⁴⁾。院内学級では、能力を得ることのみを目的としているのではなく、子どもの精神面での支援も重要視している。

小児看護学では基本的知識として、療養中の子どもへの支援としての「院内学級」について学習している。学生にとっては入院する子どもとの関わりを体験する前段階での学習であるため、院内学級の役割をより深く理解することは難しいと思われた。しかし、講演後の記述内容からは、子どもの将来を考えた支援や精神的な支えも院内学級の役割であると挙げるができていた。講演後で新たに気づいた院内学級の2つの役割については、入院している子どもの疾患や治療だけに捉われることなく、子どもを一人の人間としてみていく必要性を改めて感じられたのではないかと考える。知識を得ることに加え、相手の立場に立って考えられるという人間力を培う貴重な時間となっていた。

3) 今後の小児看護学における示唆

今回の講演では、院内学級の役割や利点についての内容だけではなく、問題についての内容も含まれていた。しかし、調査内容として院内学級の役割や利点だけに焦点を絞ったため、院内学級が抱える問題についての理解度は把握することができなかった。

現在、院内学級が抱えている問題として、通学するための転校手続きや院内学級の対象者が小・中学生であり、高校生を対象とした学習支援体制が整っていないことが挙げられる。その他にも、小児専門病院や大学病院では院内学級、訪問学級などの制度が確立されているのに対し、一般の総合病院では教育の支援体制が不十分であるといった教育的な配慮に違いがあること、医療側と学校側とが問題認識を共有できる退院調整会議を行っている施設が少ないという問題が先行研究で明らかにされている⁵⁾。講演では、教員の専門性についても言及されていた。院内学級のことを知る上では役割や利点、そして問題点も含めた視点を持つことが重要であり、今後は学生の学びを両側面から把握していく必要があると考えられた。

また、小児看護学において平均在院日数の短縮化、在宅療養重視の傾向から小児病棟だけでは運営が成り立たず、混合病棟への移行など小児看護学実習を実施する施設によっては学生の学ぶ内容に偏りがある。これらの偏りを少なくするためにも、学内での効果的な講義や演習を行っていくことが必要不可欠であろう。

今回は、院内学級に焦点を絞って学生の理解できた内容をまとめたが、学生は具体的にイメージすることで、その役割を正しく認識することができていた。この結果を生かし、実習を経験していない学生がより具体的にイメージできるよう視聴覚教材の選択、授業内容の工夫を行っていききたい。

文献

- 1) 谷口明子：長期入院児の心理と教育的援助－院内学級のフィールドワーク。東京大学出版会，2009。
- 2) 滝川国芳，西牧謙吾，植木田潤：日本の病弱・身体虚弱教育における特別支援教育体制の現状と課題－全国都道府県・政令指定都市を対象とした全数調査から－。小児保健研究，70(4)，515-522，2011。
- 3) 吉野浩之：緩和医療として提供する内容－患児の教育への配慮－。小児科診療，7(57)，1157-1166，2012。
- 4) 高橋剛実：作文分析による院内学級の教育の意義の検討。小児保健研究，72(3)，396-404，2013。
- 5) 金城やす子：入院児に対する教育支援の取り組みの実態。名桜大学紀要，17，17-28，2012。

山本 裕子・上山 和子・小田 慈

Educational Support for children with chronic disease
– Comparison of the questionnaire contents of the answer before and after
the students attend a lecture about hospital classroom. –

Yuko YAMAMOTO, Kazuko UEYAMA, Megumi ODA

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan